

# ケースメソッドを中心に据える教員養成組織

島根大学教職大学院主催講演会・ワークショップ

「スクールリーダーのためのケースメソッド」に参加して

相馬 宗胤（広島大学大学院・院生）

## 1. 講演会・ワークショップの背景

2017年2月17日（金）、島根大学教職大学院で「スクールリーダーのためのケースメソッド」という標題で講演会とワークショップが行われた<sup>1</sup>。ビジネスマネージャーの教育に起源を持つケースメソッド教育であるが、専門職教育を目的とした伝統的な教育方法であるという点で、他領域への援用可能性や、あるいはもっと一般的に、アクティブ・ラーニングを実現させる教育方法として近年注目を集めている。

そのなかで今回の会は、ケースメソッド教育によって教師教育を行うというテーマを軸に据えたものである。そして、実際に教師教育課程にケースメソッド教育を導入した事例として、島根大学教職大学院は注目されよう。当会は、島根大学教職大学院の教員と院生が運営を行い、講演者として徳島文理大学の竹内伸一教授が招かれた。参加者には、われわれ広島大学の院生含め、島根・鳥取を中心に多くの教育関係者が参加した。島根大学の関係者を含めると、およそ30名参加していたように思う。

そこで本稿では、竹内伸一教授による前半の講演会（題目：「アクティブ・ラーニング型教員研修としてのケースメソッド——過去、現在、そして未来へ」）に限った報告と若干の考察を行う。後半のワークショップについては、安喰と岡村の報告を参照されたい。

## 2. 講演内容の概要

講演会では、ケースメソッドに繋がる教育思想・教育理論として、フンボルトの「実質陶冶」「形式陶冶」の話に始まり、ハーバード・ビジネス・スクール（HBS）のデューイングによる「伝授」と「訓練」の区別、慶応大学ビジネス・スクール（KBS）の高木による「専門知識」と「実践力」の区別が紹介された。その上でケースメソッドは、「形式陶冶」「訓練」「実践力」といった概念で特徴づけられて説明された。ケースメソッドを支える思想自体が古典的なものでありながらも、いつの時代においても「劣勢」の側にあるものだという点が説明された。

次にケースメソッドの特徴や原則が説明された。特にケースメソッドの基本原則に関わって、学生と教師との協働性・共同性という考えが強調されていた。参加者中心（participant-centered）とも言われていたが、ケースメソッド教育においては学生を授業・教育の中心に据えようとする意図が大切にされている、と言えよう。そのためにも、授業者は次節をレクチャーするのではないし、扱うケースは学生にとって興味あるもので、試行錯誤しながらも取り組もうとするものであるべきなのである。その上で授業者は、明確な教育目的を持つべきであり、ディスカッションリーダーとして議論を司る能力が求められるとも説明された。

講演会の後半では、組織内でケースメソッドを行っている幾つかの先行実践例が紹介された。HBSやKBSのように、ケースメソッドを大規模的に組み込むことは現実的に難しい。それとは別に、数名の中心的な教員がいるが、組織全体がケースメソッドという方向を向いているわけではないような、いわゆる中小規模の実践例が幾つか紹介された。そし

て、これら中小規模の実践の成功の鍵となっているのは、ケースメソッドが教育方法として有効か否かという問題意識よりも、ケースメソッドに対する熱量の大きさがあると説明された。ケースメソッドが一教育方法であるという枠組みを超えて、その教育思想的・教育経営的な面へと進んでいけるような熱量が必須である、と。

講演会のむすびとして、島根大学教職大学院のアドバンテージが述べられた。それは、当教職大学院が地域の拠点となり得る点にあった。島根大学教職大学院が起点となり、ケースメソッドを通して学び、また授業者としてケースメソッド授業を実践し、ケースメソッドについて深く考えた学生が、学校現場にスクールリーダーとして入ることで、ケースメソッドという方法やその基盤となる思想をまた広げていくという再生産の図式を構築できる点に指摘していた。

### 3. 若干の考察

報告者は、これまでもケースメソッドに関するセミナーに出席したり、ケースメソッド授業を実践してみたりと、教育方法としてのケースメソッドの可能性と同時にその特殊性を実感していた<sup>2</sup>。今回は特に、教師教育の実践の場である教職大学院がケースメソッドに挑戦する、という意味で、その取組の成果や、そこにある困難などの問題に関心があった。上でまとめた講演会の内容を拝聴し、整理した上で若干の考察を展開したい。

教師にとって、参加者中心の教育を実現しながらも、ディスカッションリーダーとしての役割を担うという点は、一見すると対立しているように思われる。だが、改めて考えてみると、教師がリーダーとなるからといって、授業を受けている側が従属的立場になるわけではない。ケースメソッド授業では、学生は、現実に扱っているケースについて考えようとし、意見を述べようとし、人の意見を聞こうとすることになるだろう。このとき、学生らは必ずしも教師に対して従属的立場にあるわけではない。必要になるのは、問題を共有し、自分の意見を述べ、他者の意見に耳を傾けるという意味での「共同体意識」であると整理できるだろう。

併せて、ケースメソッドにおいては、何かを誰かから「学ぼう」という思いよりも、目の前のケースに対する解決策を探ろうという思いが先行することになるだろう。そのような意味で、ケースメソッドには特定の思考プロセスを強制しないという特徴があると指摘できる。私たちが思い浮かべる一般的な、いわゆる「授業」というのが、きわめて体系だって計画・展開されるのに対し、ケースメソッドの場合、思考のプロセスは多様であり、かつ錯綜的になる。たとえば、議論の流れに関係なく、ずっとある問題について考えるという場合もあるだろう。他の人の意見を聞いて、これまで自分が考えていたことからスッと離れ、別の問題に思い悩むこともあるだろう。あるいは、あることについてちょっと考えては、直ぐに別のことを考え始め、また別のことを考え、というふうに様々な事柄を食い散らかして考えるパターンもあるだろう。たしかに、共同で議論していることを踏まえるならば、今何が問題として共有されており、誰がどんな意見を言って、自分の意見はどういうふうに位置づいているのか、を把握できる能力が求められるのかもしれない。しかし、ケースメソッドが「形式陶冶」「訓練」「実践力」という概念で特徴づけられることを考えるならば、自分自身の思考プロセス自体を省み、実践に沿うように調整できるようになることこそが目標なのだと言えるだろう。そう考えると、ケースメソッドは特定の思考プロセスを強制しないが、自分自身の思考のプロセスを省みるよう促すものであるし、授業効果を上げるためには、自分の思考プロセスについて振り返らせる時間が必要になるだろう。

また教育思想と組織規模に関する話からは、ケースメソッドを行うことの挑戦性を感じた。前節で述べた「劣勢」という評価は、教育のそのような側面が無視されてきたという意味ではなくて、恐らく、教育学的に基礎づけしにくい、と言い換えられるかもしれない。実際ケースメソッドは、非常に労力のかかる教育方法であるにもかかわらず、教育効果が高い点に意義があるわけではない。むしろ、その教育効果は評価尺度によっては測りにくいものであろう。ケースメソッドは、教育学的に基礎づけしづらい部分を中心に据えるも

のであり、それを中軸に据えるということは、評価の仕方やアドミッション・ポリシー自体の再考を促し、ファカルティーの意識変革へと波及する効果がある。このように考えると、組織改革に対する効果こそケースメソッドの強みになるのかもしれない。いわゆる「スクールリーダー」というものがあって、そこにケースメソッドを当てはめていく、という考え方ではなく、授業を行う教員同士が、互いの授業理念や育てたい教師像を開示し、議論していく。ケースメソッドが題材となって、ファカルティー間での対話が拓かれていく、と。この話に付随して、「研究者教員と実務家教員が、互いにケースメソッド授業を作っていくという意識」を作り上げていくという竹内教授の指摘は、これからの教員養成組織の一つのモデルとしての可能性を持つと感じた。

## 注

- 1 当会の運営者の一人である島根大学教職大学院の丸橋静香准教授による報告が、島根大学大学院教育学研究科ホームページにアップロードされている。URLは以下の通り。[http://www.edu.shimane-u.ac.jp/\\_files/00223089/2\\_17school.pdf](http://www.edu.shimane-u.ac.jp/_files/00223089/2_17school.pdf)（最終閲覧日 2017年3月29日）
- 2 慶応大学ビジネス・スクールで開講されている「ケースメソッド教授法」に参加したときの報告は、平成26年度報告書に所収されている（相馬宗胤（2016）「教授法・教育内容としてのケースメソッド——『ケースメソッド教授法』からの学び」『平成26年度 教職課程担当教員養成プログラム報告書』61-68）。また、実際にケースメソッド授業を実践しての報告は、平成27年度報告書に所収されている（安喰勇平・相馬宗胤（2017年度公開予定）「2016年度『教職授業プラクティカムⅠ』の授業計画とリフレクション——講義型と討論型の複合を目指して」『平成27年度 教職課程担当教員養成プログラム報告書』6-22）。